大学出版

'97 春

No.33

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
33号

Spring · 1997

読書の周辺　「ご専門は？」からの脱出 ―― 岩垣　守彦　1
読書の周辺　出版再販制と文化政策 ―― 伊従　寛　6
東京国際ブックフェア'97 ―― 山口理一郎　11
第18回日本生命財団出版助成書目の決定まで ―― 成田　隆昌　14
歩く・見る・聞く―知のネットワーク　7 ―― 16
大学出版部ニュース ―― 18
新刊案内'97・1～'97・3 ―― 26

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
〈書籍の価格は本体価格で表示〉

■読書の周辺

「ご専門は？」からの脱出

岩垣守彦

私は世界標準サイズと言われる二七・五×七・五のカードを持って歩いている。これと万年筆。何か思いつくとカードに書き留める。昔、武蔵小金井の手前で思いつき、降りてホームのベンチで考えながらメモをしたら、四時間ほど経ってしまった。国立駅で改札を通るときに呼び止められて、何をしていたのか聞かれた（切符に発売時間が打ってあるのをそのとき初めて知った）。

このカードを見ながら講義をすることもあるが、メモしたカードは、たいていは机の箱に入れておく。年末に、それをテーマ別に整理する。

昨年は、イメージとか、イメージの順序、翻訳などに関するメモが目立った。よく「ご専門は？」と聞かれて答えに窮するが、これではますます迷うなと思った。

私の専門は「一九世紀アメリカ文学・神学思想」ということになっている。大学生のときから大学院まで、エマーソン、ソロー、ホーソン、ホイットマン、ジョナサン・エドワーズを主に読んでいたからである。

ところが、院生であったある年、アメリカ文学研究に別の視点を求めてD・H・ロレンスの『アメリカ古典文学研究』を読んだ。当時、ロレンスの本はイギリスのハイネマン社から全集が出ていて、この本もそのシリーズの中の一冊であった。今でも覚えているが、「ホーソン論」の中で原罪の意味が熱っぽく語られていた。アダムとイブは知恵の実を食べて自意識に目覚めたのである……と。ごく普通の意見であるがロレンスの語り口は熱っぽかった。私はロレンスに関心をもった。これが「ご専門」からの逸脱の始まりであった。

昨年の年末に書店に行ったら、伊藤整訳・伊藤礼補訳『チャタレー夫人の恋人』が並んでいて、男子高校生二人が買おうかどうしようか相談していたが、そう言えば私が院生の時、イギリスとアメリカで出版元が裁判に勝って無削除版が出た。早速買って読んで、涙を流した。コンスタンスやコニーやメラーズなどの登場人物に感動したのではない。知恵の実を味わいながら、食べなかったことにした

いと血を吐きながら願っている作者ロレンスを哀れに感じたからである。なぜ「愛」がそれほど問題になるんだ？と。

これが出発点となって、私はヨーロッパにおける愛を調べはじめた。そして、中世に行き着いた。『トリスタンとイズーの物語』が関心の中心になった。

ケルトの短い恋愛詩をベースに発展したこの物語は、一二世紀のアリエノール・ダキテーヌをスポンサーとした彼女の宮廷で発展し、トルバドールの誰かが媚薬を導入した。どうして媚薬が導入されたのだろう。最初は効能が三、四年であった薬効を、誰が、なぜ、永遠に続くようにしたのだろうか。中世でこの物語が生き残ったのは（あのドクター・フォースタスの魂がさまよったように）、神に背いた愛は永遠にさまよう、という勧善懲悪の物語と解されたからであろうが、「白い手のイズー」を導入したことによって、別の意味が隠されたはずであった。一二世紀という時代は、中世のルネサンスといわれるが、これは十字軍の派遣の副産物として、ビザンテュウムのギリシアの文献が流入しただけでなく、東方文化（アラビア語に訳されたギリシアの哲学やアラビア独自の文化が、スペイン、南フランス、シチリアなどでラテン語に翻訳された文化）が流入した時代であった。したがって、「白色化」という錬金術の概念が「白い手のイズー」に変換されているのであろう。物語にヘルマフロディトスという中世のキリスト教教義に反する一元化の理想が塗りこまれたのである。「水よ、お前は大胆なことよ。殿御のまだ手の触れない膝にまで跳ねるとは」というセリフが古い版から新しい版に書き換えられるにつれて「金髪のイズー」から「白い手のイズー」のセリフと移ったことに、神概念の変化、理想的人間像の変化を読むことができる。この考察はミステリーを読むような楽しみを与えてくれた。今、一冊の本にまとめている最中であるが、すでに一〇年たってしまった。『トリスタンとイズーの物語』を分析するために、フロイト、ユング、さらにはエリアーデなど、深層心理学にのめり込んでいったが、そのころ「ご専門は？」と尋ねられて当惑したものであった。

マーク王（中世キリスト教の教義）側の言う「神」と、トリスタンとイズーの「神」との間の概念のずれを考えているうちに、「言葉」「概念」「イメージ」「認識」ということを追求せざるを得なくなった。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。万物は言によって成った」（新共同訳）に始まる「ヨハネによる福音書」が気になりはじめた。神という形のないものを人間が認識するには「神」という言葉・論理が必要であるということなのだろうか。言葉・論理には無形のものを納得させる力がある。

人間は、伝達の手段として、最初は「音とリズム」を使ったはずである。それは叫び、足踏みに始まった。リズムは身のまわりにたくさんあった。小鳥のさえずり、花から花

へ飛ぶ蜂の羽音、軒先から落ちる雨垂れの音、落ち葉を寄せる風の音、つららから垂れるしずくの音、犬の吠える声、猫の鳴き声……。「最初にリズムがあった」と言ったのはドイツのピアニスト、ハンス・フォン・ビューローであるが、この時期の人間に「残像」としても「直観像」としても神のイメージが存在したとは思えない。やがて、人間は絵文字を発明する、次いで文字を作り出す。論理と知の始まりである。聴覚的伝達から視覚的伝達に入ったとき、人間は言葉から想像イメージを作ることができるようになる。人間は「神」という言葉にイメージを作ったに違いない。しかし、そのイメージは人間が論理的に納得した神のイメージであったはずだ。このひそやかな人間の論理は、次第に力をつけ、神を知解したいと公然と望むようになる。その欲求はルネサンスを起こし、近世へ、更に現代へと伸びていった。そして、地表の未知なる地域を一九世紀にほぼ征服した人間は、未知なる領域として「心」に関心を持った。その動きは、印象主義に満足できず表現主義の方向へ進もうとした画家ゴッホの一八八六年ごろの絵の中に先見性を見ることができるが、一九〇〇年にフロイトが『夢判断』を出して決定的となる。人間の好奇心は「心」にまで及び、「心」を論理化しようと企んだのである。

ユングのいう「集団無意識」は面白い仮説であり、その有効性は認めるが、これは好奇心を満足させ、人間の論理性を納得させるための仮説ではないだろうかと疑い始めて何年かすぎた。私は、「言葉」と「イメージ」「実体」と「認識」の関係をもっと深く探らなければならなくなった。

これらの関係は、「翻訳」という作業から探ることができる。

私はジャン・マケーレブ、ジョン・ベスター、アラン・ブースなどの、言葉の天才的な専門家との仕事を通して、「日英両語の等価関係――翻訳」について考えてきた。

心理学では「残像」とか「直観像」「記憶イメージ」「想像イメージ」など、心的なイメージを大切にして考察するのであるが、翻訳という作業で「イメージ」が大切に扱われたことがあるだろうか。言葉によるイメージを大切にする詩においても、イメージを意識して訳している例は少ない。たとえば、一九世紀のエミリー・ディキンソンの詩の中の

We passed the school where children played
Their lessons scarcely done;

を、たいていの訳詩集では

子供たちの遊んでいる学校のそばをすぎた
授業はまだほとんど始まっていなかった

と訳している。しかし、詩人は「(私たちの村の) 学校→子供たち→遊んでいる理由」という順序でイメージを読者に与えている。したがって、日本語に訳す際にも

学校のそばを通りました、子供たちは遊んでいました
ああ、やっと授業が終わったんだ

と訳さなければ、作者の提示したイメージの順序が壊れてしまう。イメージの順序が狂うということは認識に狂いが生じるということである。Eコードで示された「ある事象」をJコードで置き換えるに際して、現代の英文なら、なおさらイメージ順に翻訳できる。たとえば、次の英文は一九九六年八月の *The Times* の一部である。

It was almost midnight on a Saturday evening in December 1994 when General Colin Powell received a telephone call from President Clinton asking the former chairman of the Joint Chiefs of Staff to drop into the White House for a chat.

この記事から、私たちは、単位情報・イメージ順に

一九九四年の一二月ある土曜日の真夜中ごろ、コリン・パウエル将軍はクリントン大統領からの電話を受けた。クリントンが前統合参謀本部議長に言ったことは、ホワイトハウスにちょっと立ちよっておしゃべりしていかないかということであった。

という情報を得ることができる。その上、日本語としても違和感はない。このような操作は日本文を英文に「翻訳」する場合も同じである。たとえば、

やがて森が切れ海が見えてきた。黒っぽい荒れ海だが、水平線のあたりから白い帯が伸びて、川のように蛇行しつつ間近まで来ていた。

「あれ、何かしら」

「流氷だ」

「あれが、そうなの。初めて見る」和香子は窓ガラスに額をつけて目を凝らした。流氷は見る見る数を増して海を覆い、岸辺までを填め尽くした。

加賀乙彦『湿原』

という日本文がある。

Soon the forest ended and the sea appeared. The sea was dark and wild, but a white belt stretched from the horizon to (near) the shore, winding like a river.

"What's it, I wonder?"

"It's floating ice."

"Oh, Is that so? I've never seen it before," said Wakako, pressing her forehead to the window pane, and gazing closely. The number of the floating ice-burgs increased while she was looking, and they covered the sea.

と訳すことができれば、和文英訳として十分に評価されるであろうが、情報・イメージの順序が大切にされていない。ということは、日本文と同じイメージや認識を得ることができないということである。「翻訳」では、もう少していねいにイメージを追って

Before long there was a break in the forest and the sea came into view. Its waters were dark and

stormy, but with a band of white that started from near the horizon and stretched, meandering like a river, to a point close at hand.

"What's that, I wonder?"

"Ice floes."

"So those are ice floes. This is the first time for me." Wakako pressed her forehead to the window and peered out. While she was watching the floes increased in number till they covered the sea, blotting it out right up to the shore.

と訳す。この文は、日本文のイメージの順をなるべく崩さないように訳してあるし、逆に「イメージの順に」訳すと、もとの日本文にもどる。それでいて、どこも英語として違和感を感じさせてはいない。

翻訳というものは、単に「言葉を置き換える」ことではない。「ある事象」に対するある言語的認識を、別の言語的認識と置換することである。

「お散歩ですか」

は表層的には

Are you taking a walk?

であるが、深層的には

Are you out for a walk?

なのである。

伝達には直接伝達と間接伝達がある。前者は「音と足」（狩猟文化）であり、後者は「絵と手」（農耕文化）であった。前者から「音だけを表す音文字、アルファベット」が生まれ、後者から「音と意味を表す絵文字、次いで音意文字、漢字」が生まれた。前者がアルファベットを組み合わせて単語を作ったとき、無限のイメージ度を持つ間接伝達の手段が整った。一つの文字の集合が音と意味を表すという点では漢字に似ているが、漢字が象形文字としての固定イメージに縛られているのに対して、イメージ度無限のアルファベットを組み合わせた単語から自由な抽象化、概念化が起こった。当然、ドラム・トーキングのような音（リズム）による直接伝達から始まった文化と、絵文字から始まった間接伝達中心の文化とでは、イメージの作り方、認識の仕方に差異が生じる。しかし、両方のコードの特質を十分に認識すれば、等価関係、つまりイメージ順の翻訳、が成立するはずなのだが……。ああ、いつの間にか私はコミュニケーションズ・スタディズとか、カルチュラル・スタディズの分野に踏み込んでしまっている。

最近は「ご専門は？」と尋ねられると「知の領域の拡大発展に関わる事象の根底にある論理的必然性についての考究」と言って煙に巻くことにしている。もう幾年かすると定年になる。そうすれば「ご専門は？」と尋ねられることはあるまい。本は書き続ける。間もなく、何を書いてもいい自由を得ることになる。

（玉川大学文学部教授）

■読書の周辺

出版再販制と文化政策

伊従（いより）　寛

出版再販制と独占禁止法

書籍・雑誌・新聞などの出版物については、出版社が付けた定価を書店が守る契約［再販売価格維持契約＝再販制］が認められている。出版再販制が出版流通を安定させ、それが出版産業の多様な競争を促進し、戦後の出版業の発展に寄与してきたことについては多言を要しないであろう。出版産業では、競争と再販制が巧みに組み合わされ調和しながら産業の発展を助長し、文化の発展に寄与してきた独占禁止法は再販制を原則的に禁止しているが、出版再販制は五三年にドイツ法をモデルに文化政策的見地から適用除外され、許容されてきた［第二四条の二］。このとき、商標品の再販制も指定制度のもとで許容されたが、その後縮小され、九七年三月までに全廃された。

出版再販制について、九五年七月に公正取引委員会の再販問題検討小委員会［座長・金子晃慶大教授］が独占禁止法の再販禁止の原則の例外は安易に認めるべきではないとしてその全廃を提言し、また行政改革委員会の規制緩和小委員会［座長・宮内義彦オリックス社長］が同じ頃規制緩和の見地から出版再販制の是非を問題にし、その前後から出版再販制の議論が始まった。出版再販制について、九八年三月までに結論が出されることになっている。出版再販制の問題は、独占禁止法と文化政策とに関係し、極めて特殊な難しい面をもつので、まず欧米でこの問題がどうなっているかをみてみよう。

米国では、独占禁止法で再販制が違法であるとの判例が一九一一年に出たが、この判例に対する反対が強く、三七年から七五年までは出版物を含む全商標品について適用除外が行われていた。この再販制適用除外は州法と連邦法が交錯する複雑なものであったところから実施も困難になり、大規模小売店などの反対もあって七五年に廃止されたが、このころから学説は再販制をめぐってそれが原則的に違法か合法かの論争が激しくなり、それは現在まで続いている。判例は原則違法の立場をとっているが、八十年代に違法とされる再販協定は明確な合意に限定され、厳格な立証が必

要になり、緩和されてきた。八十年代の共和党政権のときには再販関係の違反事件は一件もなかった。米国では出版再販制が特別に議論されたことはないし、文化政策との関係も問題になってはいない。

日本法のモデルになったドイツ法では、再販制は当初から商標品と出版物に分けて許容され、商標品の再販制はすでに七三年に全廃されたが、文化政策的見地からの出版再販制は現在でも存続している。九六年春、第六次競争制限禁止法改正案の公表の際に、経済大臣は出版再販制は文化政策・教育政策の見地から今後も堅持すると言明している。英国では六四年の再販売価格法［現行法は七六年法］で再販制は原則的に禁止され、消費者利益に適合する場合は制限的慣行裁判所の審議を経て適用除外されるが、書籍の再販制は書籍の多様性を確保し文化水準を維持し、消費者利益を保護するとして例外的に許容されている。フランスでは、八一年の書籍定価法で文化政策の見地から出版社は書籍の定価を定め、書店はその定価を遵守する法律上の義務が課せられ、他の国の私的な契約による場合より強力な定価維持が行われている。その他の西欧諸国でも、再販制は原則的に禁止されているが、出版再販制についてはスウェーデンを除いて適用除外とされており、その理由は文化政策的見地からの配慮である。

EC委員会の出版再販制と文化政策

西欧諸国では以上のように出版再販制が文化政策の見地から許容されているが、この書籍と文化政策との関係の問題はECレベルでかなり詳細に検討されている。EC委員会は、書籍に関する政策を加盟諸国の専門家の間で検討し、八五年一一月にそれをまとめて理事会に報告した［COM(85)681 final］。その報告書では、まず書籍の意義を明確にしている。「書籍は、知識と思想の伝達の原型的なメディアであり、文化の真の象徴であって、最も多様な教育手段である」との基本認識を示している。そして、その上でECの書籍政策の目的は、「書籍が、より容易に、著作され、出版され、流通し、市民に読まれ、国の内外でできるだけ多くの読者がアクセスできるようにすること」であるとし、そのためには、同一言語圏における同一定価の維持、翻訳の奨励、図書館への助成、消費税制への配慮などが必要である、としている。

EC委員会は、以上のような文化政策的立場から加盟国の書籍再販制に対しては積極的な支持を与えてきた。EC委員会の九三年度競争政策報告書は、次のように述べている［COM(94)161 final］。「ビジネスに影響を与える競争法を適用する際に、文化の保護は常に留意されてきた関心事である。文化は、条約八五条と八六条［ローマ条約の独占禁止条項］に明言をもって定められてはいないが、委員会はこの規定のもとで審査をする場合に文化面を考慮してきた。…委員会は、書籍再販制が、個別再販制で純粋に垂

直的である限り、競争法と一致すると繰り返して述べてきた。換言すれば、委員会はすべての出版社が集団的に設定する価格、価格設定方法または販売条件には同意できないが、他方個別の出版社が書店における書籍の販売条件と小売価格を定めるシステムに賛成できる。このような立場をとるのは、競争の条件を考慮して、委員会が発行部数の少ない書籍を扱う出版社にある種の保護を与えようとしていることにほかならない。個別再販制は、より限られた読者のための書籍、したがって発行部数の少ない書籍を扱う書店を保護する。このことは、委員会が競争法を運用する場合に文化政策的見地との調和をいかに考慮しているかを示す重要な例である。」

英国書籍定価協定判決

出版再販と文化政策との関係をより具体的に示しているのは、六二年の英国の制限的慣行裁判所の書籍定価協定(Net Book Agreement: NBA)に関する判決である(LR 3 RP 246, RPC)(箕輪成男 編訳『本は違う』新泉社一九九二参照)。この判決は五六年の制限的慣行法(カルテル規制法)のもとでの判決であるが、六八年に六四年の再販売価格法のもとでも承認されている。また、NBAは欧州司法裁判所でも争われたが、同裁判所は九五年一月にNBA英国判決の考え方は尊重されるべきであると判決している[Case C-360／92 P, 1995]。NBAは英国出版協会が一九〇〇年に設定し、五七年に五六年法に適合するように改定したもので、実質的には出版社の個別再販制であり、NBAはその円滑な運用のため標準条件を設定している。

英国裁判所の判決は、書籍産業について次のように述べている。書籍は多種多様・千差万別で個性的であり、出版社はその書籍が売れるかどうかの需要予測が難しく、またコストと価格設定に関係する出版部数決定も困難で、出版にはリスクが非常に大きい。出版社は、このリスクを回避するために、さまざまな書籍を取り合わせて全体で利益を出すようにし、また初版、重版、廉価版、ペーパーバックス版などの二次的出版にも努力する。しかも出版社は、このような事業を、製作・流通・広告・宣伝などを含めて、出版社間の激しい競争の中で行っている。また書店も多様な種類があり、それぞれ多くの在庫をもちながら競争しているが、二十万点を超す発刊中の全書籍・年間二万点を超える新刊書のうちどれを陳列し、どれを在庫するか、また動きの早いベストセラーや動きの遅い専門書をどの程度に在庫するかも判断が難しく、書籍取り扱いリスクは大きい。書店はまた客から注文をうけるが、これがある書店では一日に二七〇〇件を超える注文を受け、この対応は極めて繁雑で、しかも無料サービスであり、これには取次店も出版社も関係してくる。協会側は、これらの書籍産業の難しさを克服して円滑に書籍流通を行うには書籍再販制が必要である、と主張している。

次に、ＮＢＡを廃止した場合にどのような状況が起こるかの蓋然性が検討されている。協会側は再販制の廃止が出版リスクを増大させて印刷部数が減少し、書店からの値引き要求によって書籍価格は高くなると主張し、役所側は書店の廉売競争によって書籍価格は安くなると主張した。カナダで再販制を廃止した場合の証言が行われ、そこでは再販制廃止により激しい廉売競争が起こり、その結果販売業者のマージンが増加し、それに伴って書籍価格が引き上げられ、また専門書店の減少と在庫の縮小が行われたことが示された。判決は、再販制廃止の場合、製造コストのもつ上向きの推力の方が、廉売による下向きの推力よりも緊急で影響力が大きいと判断し、消費者は大部分の書籍に対して今まで以上に高い値段を支払うことになるだろうとしている。また判決は再販制の廃止により、出版社がリスクを回避するためボーダーラインにある書籍の出版に慎重になり、出版点数は減少し、訴えたい重要問題を胸に秘めた新人著者、伝えたい新しい知識を抱えた学者、より美しいものを送りたいと願う詩人や写真家などの書籍の出版は困難になり、文芸的、学術的に価値の高い書籍の出版も困難になるであろう、としている。

結局、判決は、①ＮＢＡの廃止は、書籍価格の上昇、専門書店の減少、学術書を含む新刊書籍の数と種類の減少をもたらし、文化水準を低下させ、一般消費者の利益と利便をなくすこと、②一般消費者は再販制廃止による不利益よりも再販制維持による不利益の方が少ないこと、したがって③ＮＢＡは公益に反しないとした。

出版関係団体の再販制に関する意見

九五年七月の再販問題小委員会の報告の前後に、出版関係団体から出版再販制に関して多数の意見が提出された。そのうち、出版再販と文化政策に関係したものをみてみよう。

日本書籍出版協会と日本雑誌協会は、書籍・雑誌は、教育・学術・文化の発展に貢献する情報媒体なので、購読者が教育・学術・文化に均等にふれるためには、委託販売制と再販制のもとで、全国どこでも同じ価格になるように安定した販売システムを維持すること、また多種多様な出版社が容易に出版できることが必要である、としている。日本出版取次協会は、取次店一〇〇社が合計四〇〇〇余社の出版社から、年間一四億冊の書籍を二八〇〇〇店の書店に、年間五十億冊の雑誌を八万カ所の販売店［駅の売店やＣＶＳを含む］に毎日または一週間単位で定時に迅速に配達し、代金請求、代金回収、金融、債権保全とリスク負担をし、在庫機能と情報機能を受け持ち、一方では多数の出版社から多彩な出版物の販売要望に、他方で書店や読者からの多様な要望に、柔軟かつ効率的に対処しているが、このためには、委託販売制と再販制がなければ対処できないし、二大取次店の存在は、多種多様な出版物を迅速・効率的に全国くまなく配送するため自然に形成されたもので、その他の

総合取次店や専門取次店も自由に競争し活動し、それぞれの特徴を生かしてきめ細かいサービス提供をしている、としている。

自然科学書協会は、自然科学系の専門書は専門知識の普及や技術の継承と開発に不可欠な情報を提供しているが、専門書は多品種で高度に専門的で、したがって発行部数は少数であり、これを長期的に安定して供給する必要があり、採算も低いが、この状況を支えているのが再販制であり、この制度のもとで全国書店との「常備寄託制」や「長期委託制」が可能になっている、としている。

出版業の職人的機能

書籍は多様な人間のさまざまな精神活動の表現であり、あらゆる自然現象、社会現象にわたっているので、一口に書籍といっても、その種類はおびただしい。出版物統計の部門別分類をみても、出版物は、総記、哲学、歴史、社会科学、自然科学、技術、産業、芸術、言語、文学、児童書、参考書に分かれ、またこの中の一部門、例えば社会科学、文学をとってみてもそれは多数の小部門に分かれている。また、同じ小部門に属していても、その内容は異なる場合が多い。同じ歴史小説でも著者によってその内容は異なっている。大学出版機関が主として扱う学術研究書にしても、それは上記のすべての部門にわたり、極めて多彩で個性的・創造的な内容である。そして、これが文化の特質である。このような多彩で個性的な書籍の著作・製作・流通・陳列・消費等の段階では、職人的機能を必要とする場合が他の産業に比べてはるかに高く、出版社は芸術品の工房に近い。この職人的機能が、著作者の多様で自由な研究活動とその成果の出版に適し、出版業もその上に成立し、知識と思想の伝達を促進して、文化活動に貢献している。この特殊性を無視して、営利動機に基づく経済効率性や資本の論理で割り切ることは、出版産業に適さない。出版業の競争は、四千社をこえる出版社が再販制のもとで自由に多様に活動し、十分確保されている。

思想・言論・学問の自由と出版再販制

憲法は十九条以下で、思想の自由、信教の自由、出版・表現の自由、学問の自由を保障しているが、これらの基本的人権も、自由な出版活動があって、より適切・容易に保障され、文化・社会の発展に寄与する。思想・言論・学問の自由は、実質的には少数者のそれを保護することであるが、この少数者の出版の自由は、再販制により適切・容易に実現できる。出版再販制は、思想・言論・学問の自由を含めた文化政策と密接にかかわっていて、単なる経済問題として扱われるべきではない。多様な生活商品の氾濫に幻惑され、学術文化や精神文化が無視されがちであるが、豊かで健全な社会には物質文明のみならず、精神文化が必要である。

（中央大学法学部教授）

東京国際ブックフェア'97

山口理一郎

東京国際ブックフェア'97は一九九七年一月二三日（木）から一月二六日（日）までの四日間の会期で、東京有明に新しくオープンした国際展示場「東京ビッグサイト」で開催された。

会場となった「東京ビッグサイト」へは、新橋駅から新交通システム「ゆりかもめ」に乗り約二〇分、海と近未来都市的な建築物群の織りなす不思議な風景を巡りながら到着する。天気が良ければ冬空の中に富士山や丹沢の山並みも遠望でき、途中にあるお台場海浜公園や船の科学館など、家族連れの行楽やデートスポットとしても最適の場所の一つと言えよう。ビッグサイトのエントランスを入り、さらに四～五分動く歩道を乗りつぎ、会場の東五ホールへと至る。来訪者はここで初めて受付をし、ネームプレートを胸にガードマンのチェックを受けて入場することができる。ブックフェアの会場内は非常に天井が高く広々とした印象である。

ブックフェアの第一日目に行われた開会式は、午前九時三〇分より始まり、三笠宮名誉総裁、実行委員長の渡邊隆男理事（日本書籍出版協会）ら主催七団体の代表と参加各国の大使らによるテープカットが行われた。

今回のブックフェアの特徴は専門分野ごとに「自然科学書フェア」「人文・社会科学書フェア」「児童書フェア」「電子出版・マルチメディアフェア」「学習参考書・辞典フェア」「編集制作プロダクションフェア」「印刷・製本フェア」と七つの区分にわかれており、見学者は効率よく見ることが可能となっていることである。その他のイベントとしては、「造本・装幀コンクール展」や「洋書のバーゲンコーナー」「中古ビデオの販売コーナー」などがあり、特に洋書のバーゲンコーナーではさまざまなジャンルの洋書が特価で販売されるということで、たくさんの人々が集まり盛況であった。フェア最終日には直木賞作家の大沢在昌氏や『自我健康管理』『防癌宇宙操（ガン予防体操）』などの著者荘寿美氏によるサイン会が開催された。また会議棟で同時開催のセミナーでは、出版社向けには「版権トレードの実際」、書店向けには「書店でいかにマルチメディア商品を販売するか」、図書館向けには「インターネットを利用した検索サービス」など、専門的にテーマをしぼった各種のセミナーが開催された。

展示会場
EXHIBITION HALL
TOKYO INTERNATIONAL BOOK FAIR '97
東京国際ブックフェア'97
Organized by : Executive Committee of TIBF Planned and Managed by : Reed Exhibitions Japan Ltd.
招待者受付
VIP
OVERSEAS

大学出版部協会
AUP
大学出版部

'97東京国際ブックフェアの出展社総数は三五一社（国内＝二七九社、海外＝七二社）にのぼり、昨年度出展社総数一九〇社（国内＝一五〇社、海外＝四〇社）を大きく上回った。特に海外からの出展者はアメリカ、イギリス、香港をはじめ三十の国と地域におよび、その展示品やブースの装飾はそれぞれのお国柄を反映した多彩なもので、見るものを楽しませ、〝国際ブックフェア〟という雰囲気を演出していた。

会期中の入場者は、二三日＝七〇五九人、二四日＝七七七八人、二五日＝九二一〇人、二六日＝九〇五一人であり、総入場者数は三三〇九八人であった。（一九九六年度入場者数＝二七八六六人）

大学出版部協会では「人文・社会科学書フェア」に一画のブースを設け（№⑪－三二二ブース）二十二大学出版部から約一〇〇〇冊の専門書を展示販売した。ブースの大きさは間口一二・五メートル、奥行き二メートルと広く、これまでよりゆったりとした展示ができた。ブースの向かって右には、フェア用に新たに製作したメインパネル（布製で大学出版部協会名と各出版部名を和文と英文で表記したもの）を展示し、左には「日本生命財団出版助成図書」のパネルと最新の助成図書を展示した。

会期中に大学出版部協会のブースを訪れた人は、二三日＝八〇七人、二四日＝八四四人、二五日＝一八〇〇人、二六日＝一〇九〇人、合計四五四一人であり、全入場者のうち一三・七％の人々が訪れたことになる。また、会期中に販売された専門書は二六四冊であったが、中には一人で一〇冊ほど購入する人もあった。展示は各出版部とも基本的には一点一冊であったが、販売ということを考慮すれば、点数をしぼって平積み商品を多くするなどの必要を感じた。本ばなれ、専門書は売れないといわれて久しい昨今、考えさせられるブックフェアであった。最後になりましたが大学出版部協会ブースを訪れて下さった皆さんありがとうございました。

（東海大学出版会）

ＡＪＵＰブース　⑪－322

第18回日本生命財団出版助成書目の決定まで

成田 隆昌

日本生命財団は大学出版部協会加盟出版部に対し、「学術的・専門的見地から、出版・頒布あるいは記録・保存が強く要請されているにもかかわらず市販性の乏しい学術的専門書への出版助成」を行っている。

その分野は次の三分野である。

①日本の文化史、生活史の分野にかかわる研究
②心身の健康、児童・少年の健全育成、高齢者の福祉等の分野にかかわる研究
③人間の生活環境、自然環境の分野にかかわる研究

第一八回日本生命財団学術書出版助成書目（刊行期間一九九七年度）の決定に至る経緯は以下の通りである。

大学出版部協会が加盟出版部に第一八回の候補書目の申請を求めたのは、一九九五年末に前回の内示を受け、明けた九六年一月一九日のことであった。六月一四日には、各大学出版部からの登録書目（八大学一五点）が締め切られ、同二〇日提出された登録内容を検討するために日本生命財団出版助成小委員会が開催された。同二八日刊行助成部会を開催し、小委員会での検討結果の報告と質疑応答が行われた。登録書目は各出版部独自の判断で申請するわけであるが、協会として推薦するとなれば一点一点の書目が分野・学術性において妥当かどうかの判断を迫られる。各部会員は自分の出版部が申請している書目も含めて、出版助成の学術書としてふさわしいかを客観的に見なければならないのである。

これを受けて最終的な登録用紙が提出され、渡辺勲日本生命財団出版助成担当主幹（東京大学出版会）は財団に登録書目の申請（八大学一三点）を行った。大学出版部協会夏季研修会時に開催された刊行助成部会には野添宰男日本生命財団事業助成部長をお招きし、学術書出版助成の出発から現在に至る歴史をお話しいただくとともに、提出された申請書類についての討議を傍聴していただき財団の意向を直接うかがえたのは部会員にとって得難い経験であった。九月一八日小委員会を開催し、提出された申請書類を子細に検討し、この検討結果を受けた各出版部は直ちに正式な申請書類を作成、一〇月初旬、渡辺担当主幹より日本生命財団へ提出された。

二カ月後の一二月初旬、日本生命財団の選考委員会の慎重な審議の結果が内示として伝えられ、一九九七年三月、

同理事会で下記の七大学一一点に対し総額二七九九万円の助成を行うとの正式決定がなされたのである。

大学出版部協会加盟出版部が日本生命財団（一九七九年設立）から出版助成を受けて初めて助成図書を刊行したのは一九八〇年度であった。以後第一七回（一九九六年度刊行）までの累計で、刊行点数は一九〇点、助成金額は五億円を越えている。大学出版部の使命の一つである優れた学術書の公刊の意義を理解され、学術振興にご尽力されている日本生命財団のご見識に対し、改めて感謝の意を表したい。

（玉川大学出版部）

1996年夏季研修会・刊行助成部会（8月30日、東海大学山中湖セミナーハウス）。前列右から2人目が野添宰男日本生命財団事業助成部長。

第18回（一九九六年度）日本生命財団出版助成図書
刊行期間　平成九年四月～平成一〇年三月

①**朝天虹ヲ吐ク**　北海道大学図書刊行会
—志賀重昂『在札幌農学校第弐年期中日記』—
亀井秀雄（北海道大学文学部教授）著

②**年金保険の基本構造**　北海道大学図書刊行会
—アメリカ社会保障制度の展開と自由の理念—
菊池馨実（北海道大学法学部助手）著

③**川口鋳物の技術と伝承**　聖学院大学出版会
三田村佳子（埼玉県立民俗文化センター主任学芸員）著

④**和州吉野郡群山記**　東海大学出版会
—その踏査路と生物相—
御勢久右衛門（奈良産業大学法学部教授）著

⑤**自己注目と抑うつの社会心理学**　東京大学出版会
坂本真士（科学技術財団特別研究員）著

⑥**地球システムの化学**　東京大学出版会
—環境・資源の解析と予測—
鹿園直建（慶應義塾大学理工学部教授）著

⑦**日本古代寺院造営の研究**　法政大学出版局
森　郁夫（帝塚山大学教養学部教授）著

⑧**中世瀬戸内海地域史の研究**　法政大学出版局
山内　譲（愛媛県総合教育センター所員）著

⑨**阪神・淡路大震災における避難所の研究**　大阪大学出版会
柏原士郎（大阪大学工学部教授）編集代表

⑩**校訂本　中山詩文集**　九州大学出版会
上里賢一（琉球大学文学部教授）著

⑪**福岡平野の古環境と遺跡立地**　九州大学出版会
—環境としての遺跡との共存のために—
小林　茂（九州大学大学院比較社会文化研究科教授）編集代表

＊日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 7

文化を伝え、育ててきた文具たち

日本文具資料館を訪ねて

パソコンの普及がめざましい昨今、デジタル情報は編集作業の効率化にも欠かせないものとなっている。執筆者が原稿にフロッピーディスクをつけて提出すれば、作業は確実に早く進む。こんな現代に昔ながらの鉛筆や万年筆などの文具について考えるきっかけを与えてくれたのが「日本文具資料館」であった。

☆　☆　☆

浅草橋駅から徒歩五分、東京文具販売健康保険組合会館一階の小さな部屋に「日本文具資料館」はある。古今東西の筆記具、筆や硯、ホチキスやペーパーナイフ、そして、印章から計算機にいたるまで、さまざまな文具が並んでいる。

まず目につくのは、日本初の鉛筆かといわれる伊達政宗公の筆記具（レプリカ）である。鉛筆とはいっても、全長約七・二センチ、直径約四・三ミリの竹製の軸の先端に十ミリほどの芯が取りつけてあるというものだ。コンパクトなところはいかにも日本人の手になるものらしい。

ところで、棒状筆記具の原型はスタイラスだといわれている。ケース内のレプリカは、モダンアートのような幾何学模様がびっしりと彫りこまれていた。これで粘土板などに文字を刻んでいたという。紀元前五世紀頃のものだというが、その洗練されたデザインには、まるで映画の「スターウォーズ」に出てきそうな未来的な印象さえある。

また、昭和二十七～三十年のボールペンインク注入機も興味深い。当時のボールペンの貴重さが窺い知れるとは思うが、一回の注入料が入浴代程度（十～十五円）であったというから、そう言い切れるのかどうかはわからない。

そして、文具の王様、万年筆。スポイト式の万年筆、ウォーターマンやパーカーといった名筆と並んで、和洋折衷の美しさをたたえた、漆黒に蒔絵を施した万年筆がひときわ輝いて見えた。

☆　☆　☆

現代では、ペンやインクなどのプリミティブな文具は必要のないものであるかのように、ノートパソコンや電子手

伊達政宗公の鉛筆（レプリカ）

帳が出回っている。しかし、ちょっとしたメモをとるような場面は頻繁にあるし、そうした場合、簡便性、経済性からいってペンとメモ用紙にかなうものはない。そして編集者も、完璧な原稿とフロッピーディスクがない限り、ペンによる朱入れという作業からなかなか解放されないのが実状だ。現実には、ペンは生活の必需品なのである。

また、ワープロやパソコンが無ければ書けないと言いはる作家がいる一方、何某とかいう万年筆製作者の逸品でしか作品を書かない、などという人の話もある。「立派な万年筆を使えば、名文が生まれるかもしれない」という気分になれば、勢いがつくということもあろう。

作家でなくとも、お気に入りのペンを手に入れると、友人に手紙を書きたくなることはある。新製品を見つけるとつい手にとったりするし、より使いやすく工夫された、何より「気に入る」ペンはないかと、次の商品を心待ちにしたりする。

こうしてみると、文具とは自分の中にある未分化なものを外にひきだそうとするとき、その手助けをしてくれるものでもあるようだ。だから、実用品でありながら、ときには愛玩の対象となり、ときには護符さながらの貴重なアイテムともなりうるのであろう。

人類の歴史と文化の伝播の中で、記録という大きな役割をはたしてきた筆記具は、時代とともに比較的安価になり、少しずつ変化してきたし、これからもまた変わり続けることだろう。しかし、人々の手の届くところにあって、その思いに応えてくれるということだけは、たぶん変わらないのではないかと思うのである。

（慶應義塾大学出版会・鈴木由美子）

展示会場

日本文具資料館

〒111　東京都台東区柳橋１-１-15
（東京文具販売健康保険組合会館１階）
☎(03)3861-4905　観覧料　無料
開館時間　午前10時～午後４時
休館日　土曜・日曜・祝祭日
交通　ＪＲ総武線・都営地下鉄線
「浅草橋」下車徒歩５分

大学出版部ニュース

東京国際ブックフェア'97　テープカット

▼大学出版部協会年末例会

十二月四日（水）東京大学山上会館にて、大学出版部協会年末例会が開催されました。例会と編集・営業・刊行助成の各部会に引き続いて行なわれた懇親会では会場に各出版部の一年間の受賞図書が多数展示されて華を添えました。一九九六年の受賞図書は七大学出版部・十九点におよびます。紙面の制約上、各賞の名称のみを挙げると、次の通りです。

＊慶應義塾・義塾賞　＊日本翻訳文化賞　＊日本翻訳出版文化賞　＊日本地球科学柴田賞　＊吉田賞　＊エコノミスト賞　＊電気通信普及財団賞　＊地中海学会ヘレンド賞　＊日本不動産学会著作賞　＊アメリカ学会清水博賞　＊発展途上国研究奨励賞　＊日経・経済図書文化賞　＊サントリー学芸賞　＊造本装幀コンクール文部大臣賞　＊経営科学研究基金・経営科学文献賞　＊日本比較文学賞　＊地域農村経済学会学会賞

▼東京国際ブックフェア'97

一月二十三日（木）～二十六日（日）有明・東京ビッグサイトにて、東京国際ブックフェア'97が開催されました。大学出版部協会もブースを設け、加盟出版部の刊行図書一〇二〇点を展示しました。協会ブースへの入場者は過去最高の四五四一名を数え、総合図書目録が品切れになるほどの盛況のうちに幕を閉じました。

（詳細は、本誌一一～一三頁をご参照ください）

北海道大学図書刊行会

▼ディメノーク著、橋本ゆう子・菊間満訳『どんぐりの雨―ウスリータイガの自然を守る』（四六判・一八〇〇円）　野生動植物の宝庫といわれるロシア沿海州ウスリー川流域のタイガを舞台に自然と人間との関係をタイガ人の視点から描いたノンフィクション。『北の自然を守る―知床、千歳川そして幌延』（八木健三著・二〇〇〇円）も好評増刷出来。

▼池上二良編『ウイルタ語辞典』（A5判・九七〇〇円）　半世紀にわたる研究の集大成。ウイルタの人達からの聞き取り調査に基づいて、単語約四三〇〇項目を収録。音韻論・形態論・意味論における精密な分析だけではなく、多くの用例を添えてウイルタの人たちの伝統的言語生活を再現するとともに、詳しい民族誌的記述もなされている労作である。

▼小川正人著『近代アイヌ教育制度史研究』（A5判・七〇〇〇円）　アイヌ児童を対象とした小学校＝アイヌ学校の設置から廃止までの近代日本のアイヌ教育の展開過程を解明。詳細・緻密な実態分析に基づく本書は、近代アイヌ史にも一石を投ずる力作。日生財団出版助成図書。

聖学院大学出版会

▼学校伝道研究会編『キリスト教学校の再建　教育の神学第二集』は、キリスト教学校のチャプレーンと教員で構成される学校伝道研究会の研究をまとめたものである。教育改革、大学改革のすすめられるなかで、キリスト教学校もその存在の意味を問われている。競争原理が支配し頽廃が指摘されている教育界において、キリスト教学校の教育的使命と教育方法を現場の課題に即したかたちで論じている。「キリスト教学校の現代的意味」（大木英夫）「キリスト教大学―その形成への課題」（倉松　功）「キリスト教古典に聴く―アウグスティヌスとトマス」（茂泉昭男）「人間学から見た霊性」（金子晴勇）「キリスト教に基づく教育を考える」（松川成夫）「競争社会における教育の問題」（近藤勝彦）他を収む。

▼J・L・アダムス著『宗教の社会理論』（仮題）（柴田史子訳）は、米国の社会倫理学者アダムスの社会理論の主要論文を集めたもので、自由、共同体、結社、法などの思想の根源的な概念、またマルクス、ヴェーバー、トレルチ、ティリッヒなどの思想を宗教倫理の観点から論じている。

慶應義塾大学出版会

新刊書三点をご案内します。

▼『資本蓄積論―歴史の中の経済―』（寺出道雄著、二〇〇〇円）資本主義発展の歴史に沿って現代に至るまでの資本の蓄積過程を解説する。資本主義の原形が形成されたイギリスを中心に、東洋的専制国家としての中国、日本の入会などを具体的事例として取り上げて、多くの図表を用いて分りやすく論じている。

▼『現代日本の公共政策―環境・社会資本・高齢化―』（鈴木守著、二〇〇〇円）市場を通じての解決が困難な、副題に掲げたような諸問題に対しては、政府の積極的な介入が不可欠である。本書ではわが国の実情をふまえた望ましい介入と負担のあり方を体系的・具体的に論じている。

▼『中国怪異小説選』（八木章好編、二九〇〇円）中国古典小説の六朝志怪、唐代伝奇、聊斎志異から、幽鬼・冥界・夢幻・道術・妖怪…などのテーマ別に二四話を集録している。返り点つきの原典に訓読文と詳細な語注を付しており、大学・短大・高校などの漢文講読・古典演習に好適なテキストである。

産能大学出版部

▼『―新発見ニュースによる―最新「邪馬台国」論争』（安本美典著、一七四八円）

「最近のテレビ・新聞などの報道をみるとなにか出土するたびに、邪馬台国のあった場所の候補地が、九州になったり、畿内になったり移動しているように見える。（略）

邪馬台国のあった場所を本気でさぐろうと思うならば、これまでの出土物をトータルにみて、今回の出土物はトータルのなかで、どのていどの重要性をもつかを判断しなければならない。（略）

本書は、最近の発掘ニュースなどを整理検討し、邪馬台国やわが国の古代史について、現在なにがいえるのかを考えてみた。」（まえがきより）

邪馬台国論争は、日本古代史の研究のなかでも、学者のみならず、広く古代史に興味を持つ一般の人々も含めて、論争の最大のテーマとして注目されている。

『季刊邪馬台国』の編集責任者であり、邪馬台国研究の第一人者、鋭い洞察力と説得力ある論理的展開で、全国に多数のファンをもつ著者の会心作である。

専修大学出版局

▼石巻専修大学開放センター編『開放講座　ものと心』（一四〇〇円）大学を開いて、市民と共に地域創造をしていくことを趣旨とする「開放講座」。平成八年度の統一テーマ「ものと心」の講義内容を編んだのが本書である。

▼均等法改正など男女の社会的平等が処々で進み、フェミニズムの思想もまたさまざまに回顧・再検されている。一方で、試験官ベビーのような子宮の外部化という達成を摑んだあとの展望は、まだ弱いと言える。生殖テクノロジーは欧米ではすでに法規制されつつあるが、わが国では個人経営の病院を中心に野放しに近い。テクノロジーの権力をはじめ、真の敵はどこかで肥大しているかも知れない。

性の解放の光と影は、世界に新たな「エイズ」をまきちらすかも知れない。今春公刊をするシリーズ『性を問う』全五巻は、(1)原理論、(2)性差、(3)共同態、(4)表現、(5)ゆらぎを「性」の座標に位置づけ、哲学、社会学、芸術、生物学、人類学の研究領域を交差させて考察するものである。現在の混沌の中で、男と女はどうなっていくのだろうか。

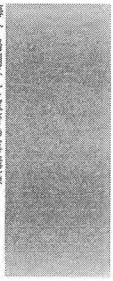
玉川大学出版部

▼佐藤郡衛著『海外・帰国子女教育の再構築―異文化間教育学の視点から―』（四七〇〇円）

海外・帰国子女教育の研究は、実践的課題の解決を急ぐあまり、理論的枠組を欠くきらいがあった。本書は異文化間教育学の視点から、異文化接触・適応の実態と要因を解明し、異文化との相互作用の場を作りあげる教育的活動として構想。

▼J・カサノヴァ／津城寛文訳『近代世界の公共宗教』（六五〇〇円）

宗教は、近代化が進むにつれ世俗化・私事化し衰退していくという憶測に反して、むしろ公的な舞台に再登場してきている。公共宗教の復興というグローバルな現象を具体的な事例で提示し、現代的な価値と共存可能で、市民社会を領域とする公共宗教がありうると結論づける。



中央大学出版部

▼藤井健三編著『アメリカ文学言語辞典』（五〇〇〇円）

本書は、アメリカの文学作品を読むうえで、一般の辞書や文法書では必ずしも充分な知識が得られない、研究書もまとまったものは未だない項目、つまり非標準的な綴り字・語形・語法・文法に関する項目及び発音等を収録している。

記述にあたっては、言語の事実は、解説よりも多く実例を通じて、その有り様を感得するものがもっとも望ましいという考えから、解説は最小限にとどめ、用例をできるだけ多く登載するのを基本方針とした。

本書がアメリカ文学作品を読む際の一助となれば幸いである。

▼武智秀之著『行政過程の制度分析』（五〇〇〇円）

日本の行政過程ほど政策合理性を制約する要因に満ちている領域もないのではないかという認識に基づき、行政学の隣接諸学を積極的に摂取し、新しい視点から社会福祉を行政学的に読み替える作業を試みる。この分析こそ行政学の存在理由を明確にするものと確信する。

東海大学出版会

▼『日本産海洋プランクトン検索図説』
千原光雄・村野正昭編
B5判／本体四五〇〇〇円

最近、多くの学問分野で海洋プランクトンを材料とする研究に取り組む人々が増えてきているが、これまでは研究の基礎となる分類・同定の困難さが障壁となっていた。本書は五〇名の研究者による植物プランクトン、動物プランクトンの解説と検索を主体とする世界にも例を見ない検索図鑑。収録＝植物五八〇種、動物一六〇〇種。図版三七一九枚。

◇内容見本呈

▼『アジア産蝶類生活史図鑑Ⅰ』
五十嵐邁・福田晴夫著
B4判／本体四二〇〇〇円

三〇〇〇点をこす鮮明な美しい写真で、アジア産蝶類三〇二種類の卵から成虫までの生活史を克明に解説。これまで未知だった珍しい種や属の生活史の謎が解明され、採集地の風景も臨場感が溢れている。アジア産蝶類の生態が手にとるようにわかる。最も情報量の多い豪華図鑑。

◇内容見本呈

東京大学出版会

古今東西、歴史学の方法を論じた書物は数多い。そのことから歴史学という学問の厳密さをうかがい知ることができる。歴史学の社会的意義を説いた書物も多く、研究者と同時代との緊張関係が想像できる。しかし、ここで私たちはもうひとつ知りたいことがある。「歴史のおもしろさってなんでしょう?」「どうして歴史学にこだわるのでしょうか?」

▼『歴史の文法』（本村凌二・山内昌之・義江彰夫編、本体価格二五〇〇円）は、一八人の歴史学者がそれぞれのフィールドで得られた素材をもとに、歴史のおもしろさ、奥深さ、その皮肉等々を平易に語る、新しい「歴史学入門」である。

本論のほかに「歴史家のアトリエ」と題するエッセイを付す。ロンドンの研究所の一室で、テヘランの図書館で、リマの文書館で、そして信州の工場で、研究者たちは史料のなかになにを見出していたのか、何を感じていたのだろうか。

歴史学の成果と、歴史学者たちの仕事へのこだわり。本書は現代歴史学の「仕事場」から読者にむけたメッセージである。

東京電機大学出版局

近代サッカーは技術や体力レベルがあがり、守備優先の戦術を採用するようになってきました。ワールドカップの一試合の平均得点をみても、大会ごとに得点が減少し最近は二点台です。その中で勝ち抜くためには、いかに効率よく確実にチャンスをものにし、ゴールを奪うかにかかってきています。一般に、豪快なロングシュートや華麗なフェイントからのドリブルシュートに目が向きがちですが、勝つためにやるべきことは別にあります。本書は、ワールドカップやレベルの高い試合のゴールシーンを科学的に分析し、豊富なゴールデータのために何をすべきかの示唆を与えます（ヴェルディ川崎監督加藤久氏推薦）。

サッカーコーチや選手に好評を博した「サッカーおもしろ科学」の姉妹編。

サッカーゴールへの科学
大橋二郎・田嶋幸三・掛水隆
共著　赤木真二写真
A5判，114頁，1400円

東京農業大学出版会

▼『ニワトリの管理』
西脇　充著、一五〇〇円

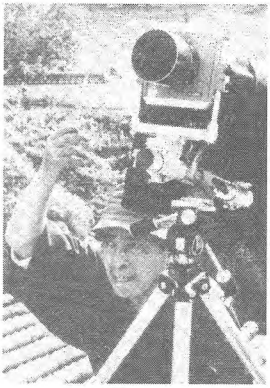
ニワトリについて、管理を中心に、次の項目順に説明していきます。

一、動物学的位置と伝播
二、品種
三、生体
四、改良
五、行動
六、孵卵
七、採卵鶏

鳥類は、爬虫類から進化した「始祖鳥」が祖先と考えられており、ニワトリの祖先は野鶏と呼ばれ、四種が現存しています。日本にニワトリが伝播したのは、中国からで、「古事記」および「日本書紀」の記載から紀元前三百年頃と考えられています。古くから人とのかかわりがあり、当初は、闘鶏用、守護神、朝の時を告げる動物、神への捧げもの等として飼われていましたが、やがて、肉・卵の食用として飼育されるようになりました。ニワトリは、「古事記」・「日本書紀」では「カケ」と呼べれており、これは、鳴き声から名付けられたようです。

法政大学出版局

▼『土門　拳―生涯とその時代』
阿部博行／四六判四七二頁／三三〇〇円



『ヒロシマ』、『筑豊のこどもたち』、『古寺巡礼』など、数々の名作を遺し、透徹したリアリズムの眼で時代の深層と日本人の心を追求した〈写真の鬼〉土門　拳―八〇年にわたる波瀾にみちた生涯とその業績を克明にあとづける初の伝記。

▼『小倉金之助―生涯とその時代』
阿部博行／四六判三七〇頁／二九〇〇円

▼『「新版」古文書学入門』
佐藤進一／A5判四〇〇頁／二九〇〇円

初版以来25年にわたって、全国の大学・研究者の大きな支持を得て33刷を数えた佐藤古文書学。近年の成果を踏まえ、細部の改訂と増補を得た待望の決定版。

放送大学教育振興会

▼放送大学は、放送教材（テレビ・ラジオ）と印刷教材とで授業を行う、まったく新しいタイプの教養学部をおく正規の大学（通信制大学）だが、その印刷教材の編集・発行が、わが放送大学教育振興会の大きな役割である。平成九年の新刊は七十六点。放送大学の第一学期に開設の三二一科目の中に含まれて、三月には学生の手元に届けられた。

▼新刊七十六点ともなると、執筆者は分担執筆者を含めて二二〇名にも及ぶ大陣容である。すると、いろいろな先生方がいらっしゃることがわかってくる。

▼某科目のA先生は、「原稿は航空便またはファックスで送る」と、昨年八月から本年六月までアメリカのC大学に行かれた。以後、ぜんぜん音沙汰なく、原稿も到着しないので、編集担当者が国際電話をかけたが留守電で連絡もなし。結局は入手できたのだが、それまでの担当者の心の中の葛藤はいかばかりか。

▼某科目のB先生は、十五章のうち、約三分の一だけ先によこして組ませ、当初「縦組」だったものを、再校段階で、「『横組』に変更せよ」とか？

明星大学出版部

▼高島秀樹著『社会調査―社会学の科学的研究方法―』

本書は大学での講義に焦点を合わせ、社会調査を社会学の科学的研究の方法と位置づけている。内容をみても、Ⅰ社会学の研究方法としての社会調査　Ⅱ社会調査の実施過程と2部に別れていることからもわかるように、その方法論としての基礎を明らかにし、実践に役立つ社会調査の技法について詳しく説明している。

▼野口京子著『性格心理学―自己理解のために―』一八〇〇円

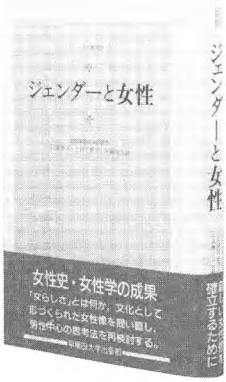
本書は性格心理の概説書であるが、学説の紹介とともに、自らの性格を知り、その人のもつ才能や、創造性を高めるということをめざしながら、精神的健康と性格の成長と変化に焦点をあてて書かれている。

早稲田大学出版部

▼『スピノザの政治哲学―『エティカ』読解をとおして―』（飯島昇藏、三九〇〇円、政治思想研究叢書8）自由で民主的な政治体制を擁護し続けたスピノザ。その思索の源泉を求めて、主著『エティカ』をつぶさに読み解く。

▼『自由主義の政治理論』（藤原保信、三七〇〇円）ジョン・ロックの『人間知性論』、アダム・スミスの『道徳感情論』などを取り上げ、リベラルな政治思想の現代的有効性を追求する。

▼『ジェンダーと女性』（田畑泰子・上野千鶴子・服藤早苗編、三四〇〇円、シリーズ比較家族8）文化として形づくられた女性像をジェンダーの視点から問い直し、男性中心の思考法を再検討する。女性史・女性学の成果を問う一冊。



名古屋大学出版会

▼牛島信明著『スペイン古典文学史』（四五〇〇円）セルバンテス、カルデロンをはじめとして、現代を挑発し続けるスペイン文学の精華を、第一人者が過不足なく論じたリーダブルな文学史。

▼吉野耕作著『文化ナショナリズムの社会学―現代日本のアイデンティティの行方―』（三二〇〇円）日本人論を文化ナショナリズムの一形態として捉え、現代消費社会におけるその行方を考察。

▼加藤弘之著『中国の経済発展と市場化―改革・開放時代の検証―』（五五〇〇円）改革・開放後の中国の市場経済化はどこまで到達したのか。その独自性と特質を独自の視点から実証的に解明。

▼佐々木雄太著『イギリス帝国とスエズ戦争―植民地主義・ナショナリズム・冷戦―』（五八〇〇円）スエズ戦争へ向かう政治過程、中東をめぐる英米関係の展開とイギリスの凋落を歴史的に考察。

▼木村眞人編『土壌圏と地球環境問題』（五〇〇〇円）陸域における地球環境汚染物質の最大の浄化の場である土壌圏。その現状と役割を訴え、機能保全と増進策を提言するためのデータを提供。

京都大学学術出版会

▼『農本思想の社会史―生活と国体の交錯―』岩崎正弥著／これまでの農本思想のとらえ方を批判的に見直し、〈生活世界〉というキー概念を基に、自然委任→社会創出→国体依存と展開される農本思想の変遷の実態を描く。

▼『「会社人間」の研究―組織コミットメントの理論と実際―』田尾雅夫編著／日本的経営は、組織への忠誠心や帰属意識を前提に、いわゆる会社人間を多数輩出してきた。その雇用形態が揺らぐ今、会社人間の成立とその未来を論じる。

▼『黒潮遭遇と認知の歴史』川合英夫著／アジアを理解する一つの鍵ともいえる黒潮認識の歴史は、意外にもほとんど研究されていない。海洋学の立場から、古代から近代にいたる東西の文献を調べあげ、黒潮の渡海交渉史を探る。

▼『Fish Communities in Lake Tanganyika』川那部浩哉編著／生物学上、優れた調査地であるタンガニーカ湖の、一八年におよぶ魚類群集研究を集大成した論文集。多様性をもちながら安定した魚類群集の関係の維持・共存のメカニズムを明らかにする。

大阪経済法科大学出版部

▼山代義雄著『地方自治法講義』

地方自治法は、地方分権推進法の施行を受けて過渡期の段階にある。本書は、地方自治法及び関連法規につき、制度の概要、法文の解釈（学説・判例、実務の運用も）を解説したもの。著者は、教員であるとともに豊富な地方行政実務経験を有している。ユニークな視点で、地方自治に関心のある読者や初学者のニーズに応えている。第一章地方自治序説　第二章地方行政とその事務　第三章住民及び住民参加　第四章地方行政組織　第五章地方行政作用および自主立法　第六章地方財務他

▼『外交の近現代的展望』〈北島平一郎著作集第三巻〉（定価二五〇〇円）

近現代の外交史論集。昨年出版された『ファシズムの理論と実際』〈第二巻〉につぐもの。日本語論文四編、英文四編を収める。「太平洋時代と日本と世界不況」「米ソ両国接近の意義と史的背景」「連合型選挙協力と人民戦線」等

「A Meaning of the Washington Naval Conference to Japan」「Emperor Showa's peace Desire」等

関西大学出版部

▼片桐洋一解題『古今序聞書』（一五〇〇円）本書は室町時代の文学、特に謡曲や軍記物語に多大の影響を与えている『古今和歌集序聞書　三流抄』の一本である。全国に伝わる写本は少なくないが、関西大学本は他本より叙述が詳細である上に「写本云　徳治二年十月七日誂或人書写之畢」という識語を持つことにおいて特に注目される。

▼渡辺幸博著『哲学の周辺―世紀末を考える―』（一五〇〇円）今世紀後半における哲学思想の特徴の一つは、構造主義、ポスト構造主義に見られるように、無意識的層（見えないもの）の原本性を明確にしたところにある。本書はこの時代精神の流れの中で執筆してきた書評や評論などを総括することによって、二十世紀末思想の実態とその意味を考察する。

九州大学出版会

▼村上陽三著『**クリタマバチの天敵—生物的防除へのアプローチ**』A5判三三〇頁・七五〇〇円。日本生命財団出版助成図書。化学農薬への過度の依存による自然環境の劣化や農地生態系の崩壊への反省から、天敵利用が世界的に注目されている。本書は、最近の天敵利用の顕著な成功例についてその背景と研究の経緯を総括し、今後の生物的防除の理論と実践のあり方に重要な指針を与える。

▼ジャン・パウル／恒吉法海訳『**ヘスペルスあるいは四十五の犬の郵便日**』A5判七〇六頁・一二〇〇〇円。「ヘスペルス」とは宵の明星の意で疲れた魂への慰謝を意味するがまた明けの明星として希望も担っている。慰謝としての物語と啓蒙的批判的語り口とが併存するこの作品には、ジャン・パウルの基本的テーマが出そろっている。一七九五年ジャン・パウルの出世作の待望の完訳。

▼稲垣良典著『**トマス・アクィナス倫理学の研究**』A5判四三二頁・五〇〇〇円。トマス研究を総合的かつ本質的に吟味し直し集大成して、現代の倫理学研究に新しい光をなげかける。〈長崎純心大学学術叢書〉

流通経済大学出版会

流通経済大学では目下「創立三十年史」の編纂を進めている。

流通経済大学は一九六五年、世界最大の総合物流企業である日本通運が資金を負担し、財団法人小運送協会が設立の窓口になって創建された大学である。

このように巨大企業の直接の出捐によって誕生した私立大学はわが国ではその例がない（企業の支援協力を受けたものはあるが）。

建学の趣旨も世界の物流のメッカたらんと、旗幟は鮮明であった。

しかし、当時のわが国は流通革命や生活の自動車化によって世の中の仕組みが様変わりしつつある時代であったので物流事業を取り巻く経営環境は厳しく、そんな中で流通経済大学は一営利企業に大きく依存して出発したのでその道筋は決して平坦なものではなかった。

大学の年輪としての三十年は長いものではないが、この大学の歴史は企業と大学の関わり方、自治と自由と経営のあり様など、日本の私立大学のこれからに示唆するところが多い。

六月中旬、発刊予定。

大阪大学出版会

日本文化の精粋として理解されている〝能〟の古典性は能そのものの内在的な価値評価から確立されたのか。

▼Gerry Yokota-Murakami著『The Formation of the Nō—The Literary Tradition of Divine Authority』菊判・五一四六円。邦題は『能謡曲の「カノン」—古典とは何か』。現在アメリカで盛んに議論されている「カノン理論」を能の研究に適用したもので、能が支配階級による特定の価値観に基づいて〝古典化〟されていった過程を分析。著者は本学言語文化学部助教授。本会の二冊目の欧文出版である。

古典芸能研究書の既刊としてM・J・スメサースト著／木曽明子訳『アイスキュロスと世阿弥のドラマトゥルギー』A5判・七五〇〇円がある。

▼九七年春刊予定

脇田　修・岸田知子著『**懐徳堂とその人びと**』四六判・予価一三〇〇円。

藤本和貴夫・木村健治編『**言語文化学概論**』A5判・予価二三〇〇円。

宮本又次著／宮本又郎監修『**住友の史的論究**』A5判・予価八〇〇〇円。

新刊案内 '97・1〜'97・3

■北海道大学図書刊行会

どんぐりの雨―ウスリータイガの自然を守る―
M・ディメノーク／橋本ゆう子・菊間満訳　一八〇〇円

Circadian Organization and Oscillatory Coupling
―Proceedings of the Sixth Sapporo Symposium on Biological Rhythm―　本間研一・本間さと編　一二〇〇〇円

ウイルタ語辞典　池上二良編　九七〇〇円

カント哲学のコンテクスト
宇都宮芳明・熊野純彦・新田孝彦編　三二〇〇円

医療保険の基本構造―ドイツ疾病保険制度史研究―
倉田　聡　七〇〇〇円

生体時系列データ解析の新展開
細田嵯一監修　笠貫　宏・大友詔雄編　二四〇〇〇円

農業雇用と地域労働市場―北海道農業の雇用問題―
岩崎　徹編著　四五〇〇円

地域づくりと生涯学習の計画化
山田定市編著　九五〇〇円

北海道の地すべり地形データベース
地すべり学会北海道支部監修　山岸宏光・川村信人・伊藤陽司・堀　俊和・福岡浩編著　二六〇〇〇円

地震による斜面災害―一九九三〜一九九四年北海道三大地震から―
地すべり学会北海道支部編　二五〇〇〇円

積雪寒冷地における高齢者の生活と運動
須田　力・森谷　絜・中川功哉　三八〇〇円

メンデレーエフの周期律発見
梶　雅範　七〇〇〇円

■聖学院大学出版会

■慶應義塾大学出版会

中国怪異小説選
八木章好編　二九〇〇円

■産能大学出版部

時間マーケティング
高谷　和夫　一四五六円

ISO9000認証取得
欧米で活用されている最新監査チェック集
B・トドロフ／(学)産能大学ISO研究会訳　二七一八円

人生を築く時間の刻み方
H・スミス著／フランクリン・エクセレンスインク監訳　一九四二円

マーフィーのあなたも幸福がつかめる
草薙　太郎　一四五六円

ヒット商品を生み、ベストセラー、ロングセラーにするための条件
西田　弘　一四五六円

投資のプロたち
D・ドネリー／三菱信託銀行証券投資研究会訳　二四二七円

最新「邪馬台国」論争
安本　美典　一七四八円

大競争時代の社長の戦略ノート
西塚　宏　二四二七円

企業の経営倫理と成長戦略
F・アギュラー／水谷雅一監訳　二四二七円

伸びる子の塾選び
水野　安博　一四五六円

■専修大学出版局

A THESAURUS OF IDIOMS
石川　敏男　二八〇〇円

開放講座　ものと心　石巻専修大学開放センター編　一四〇〇円
今村力三郎訴訟記録　帝人事件(九)　専修大学今村法律研究室編　四一七五円

■玉川大学出版部
大学カリキュラムの再編成—これからの学士教育—　清水畏三・井門富二夫編　四〇〇〇円
山に寄せる心—人生のロマンを求めて—　徳久　球雄　二八〇〇円
鬼の来た道—中国の仮面と祭り—　廣田　律子　三〇〇〇円
アメリカの風土と地域計画　M・ブラッドショー／正井泰夫・澤田裕之訳　三四〇〇円
児童期から思春期へ—モンテッソーリの一貫教育—　M・モンテッソーリ／K・ルーメル・江島正子訳　二〇〇〇円
海外・帰国子女教育の再構築—異文化間教育学の視点から—　佐藤　郡衛　四七〇〇円
遙かなるスミソニアン—博物館と大学とアーカイブスと—　松本　栄寿　二五〇〇円

■中央大学出版部
創立50周年記念　国連年鑑特別号
—国連半世紀の軌跡（一九四五—一九九五）—　国際連合広報局編／国際関係法研究会・他訳　一五〇〇〇円
寡占市場と戦略的参入阻止　川島　康男　二六〇〇円
オービニャック師　演劇作法　戸張智雄訳　四〇〇〇円
ケルトの古歌『ブランの航海』序説
—十九世紀英国の詩と批評—　松村　賢一　二五〇〇円

■東海大学出版会
アジア産蝶類生活史図鑑Ⅰ　五十嵐邁・福田晴夫　四二〇〇〇円
日本産海洋プランクトン検索図説　千原光雄・村野正昭編　四五〇〇〇円
地球科学の発展と展望　藤原鎮男編　七〇〇〇円
バイオミネラリゼーション—生物が鉱物を作ることの不思議—　渡部哲光　四二〇〇円
太陽系の起源と進化—地球誕生の謎をさぐる—　A・A・マラークシェフ／押手・小森・青木訳　二八〇〇円
In Pursuit of Common Values in Asia-Japan's ODA Charter Re-evaluated　松前達郎、L・C・チェン編　三〇〇〇円
新版線形代数　基礎数学研究会編　一二〇〇円
新版微分積分学　基礎数学研究会編　一三〇〇円
多様性生物学入門—ヒトへの道程—　栗田子郎　二五〇〇円
ハンセン病医学　斎藤・牧野・村上・長尾編　四八〇〇円
日本の有害節足動物—生態と環境変化に伴う変遷—　加納六郎・篠永　哲　一五〇〇〇円
BIOLOGY OF THE MEGAMOUTH SHARK　矢野和成・J.F.Morrissey・藪本美孝・仲谷一宏編　五〇〇〇円
文化変容ストレスとソーシャルサポート
—多文化社会カナダの日系女性たち—　木村真理子　三八〇〇円
統計数学序論　氏家勝巳・土居　誠　二二〇〇円
感覚変容の記号論〈記号学研究17〉　日本記号学会編　二八〇〇円

■東京大学出版会
ラブレー周遊記　宮下　志朗　二九〇〇円
現代日本の政治過程—日本型民主主義の計量分析—　小林　良彰　三二〇〇円
現代都市と地域形成—転換期とその社会形態—　蓮見音彦／似田貝香門／矢澤澄子編　五四〇〇円
社会福祉における市民参加　社会保障研究所編　四八〇〇円
フランス住宅法の形成
—住宅をめぐる国家・契約・所有権—

哺乳類の生態学　吉田　克己　一一〇〇〇円
共生の森〈熱帯林の世界6〉　土肥昭夫・岩本俊孝・三浦慎悟・池田　啓　三八〇〇円
日本植物研究の歴史―小石川植物園三〇〇年の歩み―　寺嶋　秀明　二二〇〇円
〈東京大学コレクションⅣ〉
樞密院高等官履歴　第四巻　大正ノ二　大場秀章編　三〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇84　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇117・118　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
大日本史料　第五編之二十　東京大学史料編纂所編　一七〇〇〇円
大日本史料　第一二編之二十　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
水の国の歌〈熱帯林の世界7〉　木村　秀雄　二二〇〇円
社会学理論〈リーディングス日本の社会学1〉　塩原　勉・井上　俊・厚東洋輔編　三四〇〇円
方法　教養の日本史　竹内　誠・佐藤和彦・君島和彦・木村茂光編　二五〇〇円
教育への問い―教育学入門―　天野郁夫編　二五〇〇円
高齢化社会の生活保障システム　八代尚宏編　三四〇〇円
税制改革と官僚制　加藤　淳子　五七〇〇円
中国科学技術史　上　杜石然他編著／川原秀城他訳　五八〇〇円
高山植物の生態学　増沢　武弘　三八〇〇円
日本のシダ植物図鑑8　倉田　悟・中池敏之編　一六〇〇〇円
東京大学　現状と課題2　1992～1996　東京大学編　三八〇〇円
現象学から授業の世界へ
―対話における教師とこどもの生の解明―　中田　基昭　一一〇〇〇円
在日韓国人青年の生活と意識　福岡安則・金明秀　五八〇〇円
ニジェール川大湾曲部の自然と文化　川田順造編　二四〇〇〇円
東京大学史料編纂所写真帳目録1　東京大学史料編纂所編　八〇〇〇円
樞密院高等官履歴　第五巻　昭和ノ一　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇85　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇119・120　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
大日本史料　第五編之二十一　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本史料　第十二編之二十一　東京大学史料編纂所編　一五〇〇〇円
社会学思想〈リーディング日本の社会学2〉　佐藤　勉・細谷　昂・村中知子編　四四〇〇円
テクノコードの誕生―コミュニケーション学序説―
ヴィレム・フルッサー／村上淳一訳　三六〇〇円
学問論―ポストモダニズムに抗して―　佐々木　力　四五〇〇円
西洋古代史研究入門　伊藤貞夫／本村凌二編　三八〇〇円
唐令拾遺補―附唐日両令対照一覧―
仁井田　陞／池田　温編集代表　四〇〇〇〇円
近代日本農民運動史研究　西田　美昭　六四〇〇円
中国科学技術史　下　杜石然他編著／河原秀城他訳　五八〇〇円
重複障害児との相互輔生―行動体制と信号系活動―　梅津　八三　六〇〇〇円
概説　日本の地方自治　阿部　斉・新藤宗幸　二二〇〇円
国際行政の構造　城山　英明　五七〇〇円
計量社会科学
SASによる多変量データの解析　松原　望　三二〇〇円

〈SASで学ぶ統計的データ解析4〉　前川　眞一　四六〇〇円
火山とマグマ　兼岡一郎・井田喜明編　三四〇〇円
メソ気象の基礎理論　小倉　義光　四二〇〇円
海洋生物と炭素循環　鈴木　款編　四五〇〇円
航空宇宙材料学　塩谷　義　三四〇〇円
樞密院高等官履歴　第六巻　昭和ノ二　国立公文書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇86　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇121・122　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
大日本史料　第五編之二十二　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本史料　第十二編之二十二　東京大学史料編纂所編　一五〇〇〇円

■東京電機大学出版局
熱力学考え方解き方〈わかりやすい機械教室〉　小林　恒和　二三〇〇円
油圧の基礎と応用〈わかりやすい機械教室〉　高橋　徹　二六〇〇円
流体の基礎と応用　改訂版〈わかりやすい機械教室〉　森田　泰司　二二〇〇円
サッカーゴールへの科学　大橋二郎・田嶋幸三・掛水隆　一四〇〇円
早わかり第二種電気工事士受験テキスト改訂版　渡辺敏章他　二二〇〇円
機械計算法シリーズ　機械の力学計算法　橋本　広明　一四〇〇円
化学計算法シリーズ　物理化学の計算法　鈴木善孝他　二三〇〇円
学生のための一太郎for Windows　若山芳三郎　一七〇〇円
学生のためのExcel　若山芳三郎　一六〇〇円
発想配電・材料〈基礎テキスト〉　前田隆文・吉野利弘・田中政直　三〇〇〇円
Mathematicaによるメカニズム　小峯　龍男　三〇〇〇円
わたしのホームページ　浜田晴夫監修　岡田智子　二四〇〇円
歴史学―国際化とその相互理解のために　鈴木　邦夫　二四〇〇円
ネットワーカーのためのイントラネット入門　日本ユニシス情報技術研究会　二四〇〇円
量子コンピュータ入門〈情報科学セミナー〉　西野　哲朗　二六〇〇円
ディジタル放送技術　松尾　憲一　二一〇〇円
第二種情報処理試験問題集　午後　荒川　幸式　二一〇〇円
ISO規格等に基づく計測の基礎　関　和雄　二一〇〇円
プログラマのためのDelphi 2入門　小山裕徳訳　三八〇〇円
プロジェクトマネージャ試験　午前　荒川　幸式　二六〇〇円

■東京農業大学出版会
Rehabilitation and Development of Upland and Highland Ecosystem　穴瀬　真　他編　二四二八円

■法政大学出版局
ルイス・キャロル物語　R・L・グリーン／門馬義幸・門馬尚子訳　二二〇〇円
ルイス・キャロル―AliceからZenonまで―〔新装版〕　J・ガッテニョ／鈴木晶訳　三三〇〇円
肉体の文化史―体構造と宿命―〔新装版〕　S・カーン／喜多迅鷹・喜多元子訳　二九〇〇円
ヴァイキング・サガ〔新装版〕　R・プェルトナー／木村寿夫訳　三三〇〇円
西田幾多郎　その軌跡と系譜〔新装版〕　藤田　健治　二二〇〇円

ブルース―複製時代のフォークロア―〔新装版〕　湯川　新　一四〇〇円
土門　拳―生涯とその時代―　阿部　博行　三三〇〇円
分析哲学の発展　竹尾治一郎　二八〇〇円
意味と世界―言語哲学論考―　野本　和幸　六五〇〇円
彫　像―定礎の書―　M・セール／米山親能訳　三八〇〇円
暴力と差異―ジラール、デリダ、脱構築―　A・J・マッケナ／夏目博明訳　三八〇〇円
ホモ・テキステュアリス―二十世紀欧米文学批評理論の系譜―　荒木　正純　一六〇〇円
ヒューム哲学と「神」の概念　斎藤　繁雄　四二〇〇円
地方仏Ⅱ〈ものと人間の文化史41―Ⅱ〉　むしゃこうじ・みのる　二四〇〇円
タオスのロレンゾー―D・H・ロレンス回想―　M・D・ルーハン／野島秀勝訳　四八〇〇円
続・ヘーゲル読本―翻訳篇―　加藤尚武・座小田豊編　二八〇〇円
ロゴスと言葉―言語・詩学・聖書解釈―　S・プリケット／小野功生訳　五二〇〇円
スポーツ社会学研究　第5巻　日本スポーツ社会学会編・発行　一九〇〇円
後期論文集Ⅱ〈ピエール・ベール著作集　第八巻〉　野沢　協　全訳・解説　四七〇〇円
自己意識とイロニー―マン、カフカ、正負のアイデンティティー―　M・ヴァルザー／洲崎恵三訳　二八〇〇円
東アジア工業化ダイナミズム―21世紀への挑戦―〈比較経済研究所研究シリーズ12〉　法政大学比較経済研究所・粕谷信次編　三八〇〇円
哲　学　48号―特集・現代の精神的状況における自我の問題―　日本哲学会編　一八〇〇円
家と共同体―日欧比較の視点から―　岩本由輝・國方敬司編　二八〇〇円
ローマ　定礎の書　M・セール／高尾謙史訳　四七〇〇円
労働条件を巡る現代的課題〈法政大学現代法研究所叢書16〉　金子征史編著　三四〇〇円
エル・シッド―中世スペインの英雄―　R・フレッチャー／林　邦夫訳　三八〇〇円
盗まれた稲妻―呪術の社会学―　上・下　D・L・オキーフ／谷林眞理子・小池久恵・藤澤美枝子・他訳　上　四八〇〇円　下　六〇〇〇円

■放送大学教育振興会

子どもと若者の文化　本田　和子　一六〇〇円
生涯発達と生涯学習　麻生　誠・堀　薫夫　二〇〇〇円
変わる社会と大学　牟田　博光　二〇〇〇円
〈改訂版〉心理学入門　相場　覺　二〇〇〇円
教育心理学―主張と思想　永野　重史　一六〇〇円
乳幼児心理学　三宅和夫・内田伸子　一六〇〇円
知覚心理学　相場　覺・鳥居修晃　二四〇〇円
倫理学入門　宇都宮芳明　二〇〇〇円
西洋思想の源流　岩田　靖夫　二八〇〇円
仏教思想　末木文美士　一六〇〇円
プラグマティズムと現代　魚津　郁夫　二〇〇〇円
日本語表現法　清水　康行　一六〇〇円
近代の日本文学　浅井　清　一六〇〇円
中古の日本文学　小町谷照彦　二八〇〇円
中国古典詩学　佐藤　保　三二〇〇円
中国における小説の成立　竹田　晃　一六〇〇円
日本語の変遷　山口　明穂　二〇〇〇円
日本語教育概論　水谷　信子　一六〇〇円
歴史学の現在　福井　憲彦　一八〇〇円

イスラーム世界史　後藤　明　一六〇〇円
ヨーロッパと近代世界　川北　稔　一六〇〇円
芸術の古典と現代　青山　昌文　二四〇〇円
西洋音楽の歴史　笠原　潔　三〇〇〇円
演劇を読む　渡辺守章・渡辺　保・浅田　彰　二二〇〇円
生活経営論　清野　きみ　二四〇〇円
新しい都市居住の空間　渡辺定夫・服部岑生・本間博文　二六〇〇円
〈改訂版〉青年期の健康科学　鬼頭　昭三　二二〇〇円
看護学概論　ケイコ・イマイ・キシ　一六〇〇円
保健体育―生涯スポーツの科学　渡邊　融・臼井永男　一八〇〇円
障害者福祉論　三ツ木任一　二二〇〇円
世界の社会福祉　松村　祥子　二二〇〇円
国家と人間―憲法の基本問題　佐藤　幸治　二〇〇〇円
刑法学　大谷　實　一六〇〇円
国際関係論　阿部　齋・高橋和夫　二〇〇〇円
日本政治思想史―近世を中心に　平石　直昭　一六〇〇円
近代国家と近代革命の政治思想　松本礼二・川出良枝　二〇〇〇円
現代アメリカの政治　阿部　齋・久保文明　一六〇〇円
〈改訂版〉日本政治史　坂野　潤治　二二〇〇円
西欧都市の政治史　田口　晃　二〇〇〇円
経済学史入門　根岸　隆　一六〇〇円
〈新版〉国際経済学―理論と実際　嘉治　元郎　一四〇〇円
〈改訂版〉生産経営論　熊谷　智徳　四〇〇〇円
不動産学の基礎　高辻秀興・前川俊一　二〇〇〇円
社会学入門　長谷川公一　一六〇〇円
社会科学入門　坂井素思・岩永雅也・橋本裕蔵　二〇〇〇円
メディア論　吉見俊哉・水越　伸　二四〇〇円
比較文明の社会学　米山俊直・吉澤五郎　一八〇〇円
ベンチャー企業論　森谷正規・藤川彰一　二〇〇〇円

農業経営　西村　博行　二二〇〇円
現代産業組織論　武蔵武彦・広瀬弘毅　二〇〇〇円
先端工学　道家　達将　二〇〇〇円
計測と制御　森　政弘・森田矢次郎・中野道雄　二八〇〇円
〈改訂版〉数学の歴史　長岡　亮介　一八〇〇円
確立論　馬場　良和　二〇〇〇円
〈新版〉統計学　長坂　建二　二四〇〇円
カオスの数理と技術　合原　一幸　二六〇〇円
〈改訂版〉科学実験法　兵頭　申一　二八〇〇円
〈改訂版〉力学　堀　源一郎　二二〇〇円
〈改訂版〉現代物理学　小沼　通二　二六〇〇円
〈改訂版〉量子力学　阿部龍蔵・川村　清　二〇〇〇円
〈改訂版〉病気の成り立ちと仕組み　鬼頭　昭三　二二〇〇円
生物学の歴史―進化論の歴史　横山　輝雄　一六〇〇円
生命と物質　中澤　透　二四〇〇円
〈改訂版〉分子生物学　三浦謹一郎　二六〇〇円
天体物理学入門―恒星を主な対象として　吉岡　一男　二八〇〇円
天体と宇宙の進化Ⅰ―宇宙の歴史と現在　杉本大一郎　二六〇〇円
天体と宇宙の進化Ⅱ―宇宙の観測　杉本大一郎　二二〇〇円
英語Ⅴ（'97）　内野　儀・佐藤良明　二四〇〇円
英語Ⅶ（'97）　佐藤良明・柴田元幸　二四〇〇円
ドイツ語Ⅲ（'97）　石光　泰夫　一六〇〇円
フランス語Ⅰ　増田一夫・鈴木啓二　一六〇〇円
フランス語Ⅱ　増田一夫・鈴木啓二　一六〇〇円
〈新版〉中国語Ⅰ　傅田　章　一六〇〇円
〈新版〉中国語Ⅱ　傅田　章　一六〇〇円
ロシア語Ⅰ　川端香男里　二二〇〇円
ロシア語Ⅱ　川端香男里　二〇〇〇円

■明星大学出版部
社会調査―社会学の科学的方法―　高島　秀樹　三七〇〇円

■早稲田大学出版部
自由主義の政治理論　藤原　保信　三七〇〇円
シェリング哲学入門　H・バウムガルトナー編／北村実監訳　四四〇〇円
フランス戦間期経済史　A・ベルトラン、P・グリゼ／原輝史監訳　三七〇〇円
現代国家と集団の理論―政治的プルラリズムの諸相―［新装版］　中野　実　三八〇〇円
エリザベス朝喜劇10選　第Ⅱ期・全10巻
6　オランダ人娼婦　J・マーストン／山田英教訳　二二〇〇円
政治思想研究叢書
8　スピノザの政治哲学―『エティカ』読解をとおして―　飯島　昇藏　三九〇〇円
シリーズ比較家族／比較家族史学会監修
8　ジェンダーと女性　田端・上野・服藤編　三四〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇／第12回配本
第18巻　天文暦学書集　Ⅱ　杉本つとむ編　二九一二六円

■名古屋大学出版会
アメリカ巨大企業体制の成立と銀行―連邦準備制度の成立と展開―　須藤　功　六〇〇〇円
巨視的経済理論の軌跡
―リカードウ、マルサスから「ケインズ革命」まで―　岡田　元浩　五五〇〇円
スペイン古典文学史　牛島　信明　四五〇〇円
インドへの医療協力
―名古屋大学とサンジャイ・ガンジー医科学研究所の交流―　加藤延夫・石垣武男・林　博史・鈴木善男編　五〇〇〇円
文化ナショナリズムの社会学
―現代日本のアイデンティティの行方―　吉野　耕作　三二〇〇円
中国の経済発展と市場化―改革・開放時代の検証―　加藤　弘之　五五〇〇円
修道院と農民―会計文書から見た中世形成期ロワール地方―　佐藤　彰一　一六〇〇〇円
人間性の医学
飯島宗一・加藤延夫監修　堀田知光・太田美智男編　二〇〇〇円
テキスト医学生物学　太田美智男編　六〇〇〇円
イギリス帝国とスエズ戦争―植民地主義・ナショナリズム・冷戦―　佐々木雄太　五八〇〇円
土壌圏と地球環境問題　木村眞人編　五〇〇〇円
アジア型開発の課題と展望―アジア開発銀行30年の経験と教訓―　嘉数　啓・吉田恒昭編　五〇〇〇円
空調システムの最適設計　中原信生編　一〇〇〇〇円

■京都大学学術出版会
農本思想の社会史―生活と国体の交錯―　岩崎　正弥　三八八三円
「会社人間」の研究―組織コミットメントの理論と実際―　田尾雅夫編著　四一七五円
黒潮遭遇と認知の歴史　川合　英夫　四六六〇円
Fish Communities in Lake Tanganyika　川那部浩哉編著　八七三八円

■大阪経済法科大学出版部
経済原論　相澤　秀一　一九〇〇円
THE JAPANESE ECONOMY TODAY
―50 YEARS AFTER WORLD WAR Ⅱ―

外交の近現代的展望〈北島平一郎著作集第三巻〉　林　直道　二五〇〇円　二五〇〇円

■関西大学出版部

哲学の周辺―世紀末を考える―　渡辺　幸博　一五〇〇円
古今序聞書　片桐洋一解題　一五〇〇〇円

■九州大学出版会

英語学論考―英語史と英語音声学をめぐって―　添田　裕　三五〇〇円
ドイツ語における音韻過程―理論と分析―　行重　耕平　六〇〇〇円
記憶のリハーサル機構　山口　快生　五二〇〇円
中世後期ライン地方のツンフト「地域類型」の可能性
―経済システム・社会集団・制度―　田北　廣道　六五〇〇円
日本における糞線虫と糞線虫症　城間祥行・佐藤良也編著　四四〇〇円
発育脳の生体情報制御システムとその臨床　小川　昭之　八〇〇〇円
古英語のケニング―古ゲルマン詩文体論への寄与―
ヘルタ・マルクヴァルト／下瀬三千郎訳註　一二〇〇〇円
公共経済の諸要素　チェーザレ・ベッカリーア／三上禮次訳　五五〇〇円
西南諸藩と廃藩置県　長野　暹編　九〇〇〇円
幕末期佐賀藩の藩政史研究　木原　溥幸　九五〇〇円
クリタマバチの天敵―生物的防除へのアプローチ―　村上　陽三　七五〇〇円
患者の権利〔改訂増補版〕　池永　満　二五二四円
トマス・アクィナス倫理学の研究〈長崎純心大学学術叢書〉　稲垣　良典　五〇〇〇円
異文化間教育学序説〔第二版〕　江淵　一公　九五〇〇円
―移民・在留民の比較教育民族誌的分析―
ヘスペルスあるいは四十五の犬の郵便日　ジャン・パウル／恒吉法海訳　一二〇〇〇円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会

The Formation of the Nō
―The Litarary Tradition of Divine Authority―
Gerry Yokota-Murakami　五一四六円

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1—1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108 東京都港区三田2—19—30 TEL. 03-3451-3584　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238　FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6—1—1 TEL. 0427-39-8935　FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742—1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2—28—4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7—3—1　東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2—2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1—1—1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2—14—1 TEL. 03-5228-6271　FAX. 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2—1—1 TEL. 0425-91-9979　FAX. 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1—103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1　名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6—10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3—3—35 TEL. 06-368-1121　FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7—1—146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614　FAX. 06-877-1614

大学出版(第33号) '97春　平成9年4月1日発行　発行所／大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956
頒布価格100円　〒共